

「行ってきます」「行ってらっしゃい」。子どもを送り出す、ごく普通の朝の光景だ。

5～6月の小児科には風邪などの子に交じり、朝起きられない▽登校できない▽集団生活に馴染めない▽などの心理や発達の問題が結構あり、その数は増えている。訴えは多様で、原因が不明な例も多い。年齢は9歳から15歳までが大抵だ。過敏で感じやすい、感情コントロールが難しい、年齢より幼い、低血圧といった体質など、本人の特性も背景にある。

夜眠れず、朝は起きられずに体調不良を訴える子は、休むと元気になる。そのため大人は「仮病?」「甘えているだけ」と疑い、責め

あだちこども診療所所長

足立 昌夫

不登校まずは大人が冷静に

てしまいがちだ。

学校に行くべきということとは分かる、でも行けないという子ども「心の叫び」。学校は普通に行つてのみ、次のステップがあると、思う親の「焦り」。その両者が拮抗する。親は「どうして?」「そんなことじゃあ」と叱責し、子ども

もは反発する。

親にとつてはとてつもない恐怖や絶望で、家族が壊れそうになる。両親だけでなく祖父母も巻き込み、家庭は修羅場になる。でも、相談を通して感じるのは大抵の子どもは幼く、先を見通せない存在だ。ただ利他的に、今を

生きているだけ。一方、絶望で慌てふためき、将来を悲観するのは

社会の仕組みを知っている大人だけ。つまり深刻なのは圧倒的に大人なのだ。考えてみれば、そもそも9歳から15歳ぐらいの子どもは、大人が思っているほど心身とも強くない。一人前の口をたたき、反発してみせても、自らの感情をコント

ロールする力は期待できない。この事実を大人は忘れがちだ。不登校には、家庭・教育・医療などの連携が必要だが、結局は本人の気持ちに変化し、現実を受け入れるのを待つしかない。いつかそんな時が来て「あのとき」を笑って話せるようになる。そう信じて待つ大人の我慢が不可欠だ。

大人にとつて進級、進学、受験、就職などで、子どもが「普通」から外れる恐怖は半端ではない。だが、たとえ回り道しても親の期待と違う形でも、今を乗り越えさえ

すれば、後は「どうにかなる」のだ。多感多様な時期だが、長い人生のほんの一部でしかない。今が少々曇っていても、先の人生が曇りとは限らない。

まずは大人が落ち着こう。たとえわが子が不登校になろうとも終わりじゃない。彼らの人生はそこで閉ざされることなく、いろいろな選択肢が残っている。ギリギリでよいかどうかこの時期を過ぎれば、きっと転機が訪れ、「いつか晴れる」のだから。同じ体験をした娘を持つ親として、そして子どもの心や体を守る医師として、自戒や願いを胸に、子どもや親御さんたちと向き合う日々だ。

見る
思う



あだち・まさお 1969年加古川市生まれ医学博士。神戸大学大学院、加古川西市民病院を経て2014年、同市内に診療所を開設。専門は小児神経学、てんかん。心理発達や障害児者医療・福祉にも精通。